

4. 岩座神五霊神社の建築とその使われ方

岸 泰子・橋本 唯

はじめに

五霊神社は、多可町の岩座神地区にある神社である。創建年月日は不明で、祭神は高皇産霊命神皇産霊命外三柱である（『多可郡誌』）。

本章では、建造物調査にもとづき五霊神社の特徴について述べる。まず、五霊神社の建造物の形式等について解説し、これらの建造物の使い方・使われ方をオトウワタシを事例に述べていく。

1 五霊神社の建造物

(1) 境内

岩座神地区の中心部、多田川の西側には棚田が広がる。五霊神社は、その棚田と川を挟んで東側の山の麓に位置する。境内は多田川にかかる橋を渡り山道を東に少し進んだところにある。境内の建物の構成は以下のとおりである。入口にあたる場所には隨身門が西面して立つ。隨身門をくぐり、石段を登ると本殿・幣殿・拝殿がある。本殿が立つ敷地は拝殿がたつ敷地よりも一段高い位置にある。ま

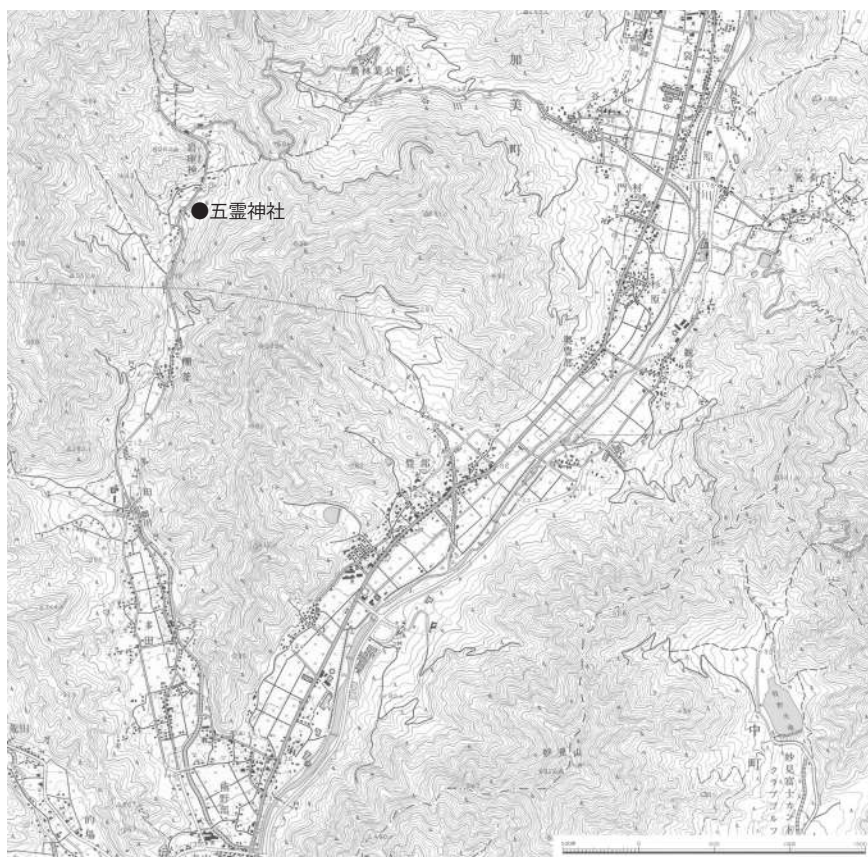


図1 五霊神社位置図

た拝殿の南側には御供部屋がある。ほかにも境内には末社（宮嶋神社、金比羅神社）がある。

（2）本殿

本殿は、境内の東に西面して立つ、やや大きめの規模の一間社流造、柿葺の建物である。

身舎の正面には棧唐戸を入れ、側面と背面を板壁で閉じる。身舎の内部は一室からなり、背面側に壇を備える。壇の正面には板戸を入れる。身舎の軸部は、円柱を切目長押、内法長押、頭貫木鼻、台輪で固める。組物は出組実肘木で、拳鼻が付く。中備は側面に墓股を入れる。妻飾は太瓶束笈形である。身舎の三方には樽縁を廻し、正面に木階五級を付ける。庇は、几帳面取の角柱を虹梁形頭貫木鼻で繋ぐ。組物は連三斗枳肘木組で、中備は墓股である。身舎と庇は反りのやや大きい海老虹梁で繋ぐ。

特徴としては、装飾がやや豊富である。支輪には波渦彫刻を入れ、頭貫に付く木鼻は前方に飛び出したような独特なかたちの獣頭彫刻とする。

建立年代は、棟札から弘化2年（1845）とわかる。彫りが深くやや複雑な形状をしている絵様からみても妥当である。

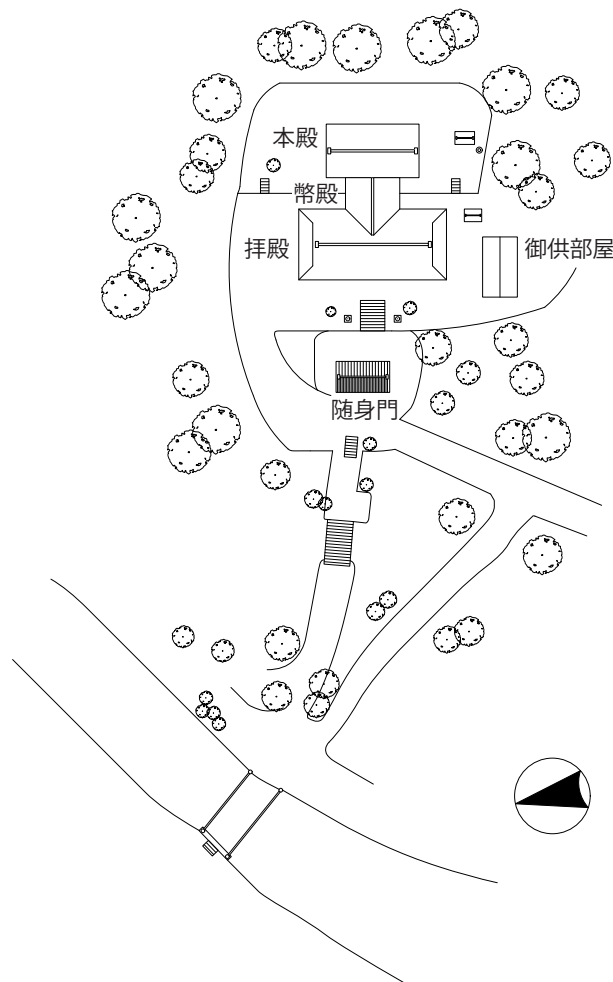


図2 五霊神社配置図

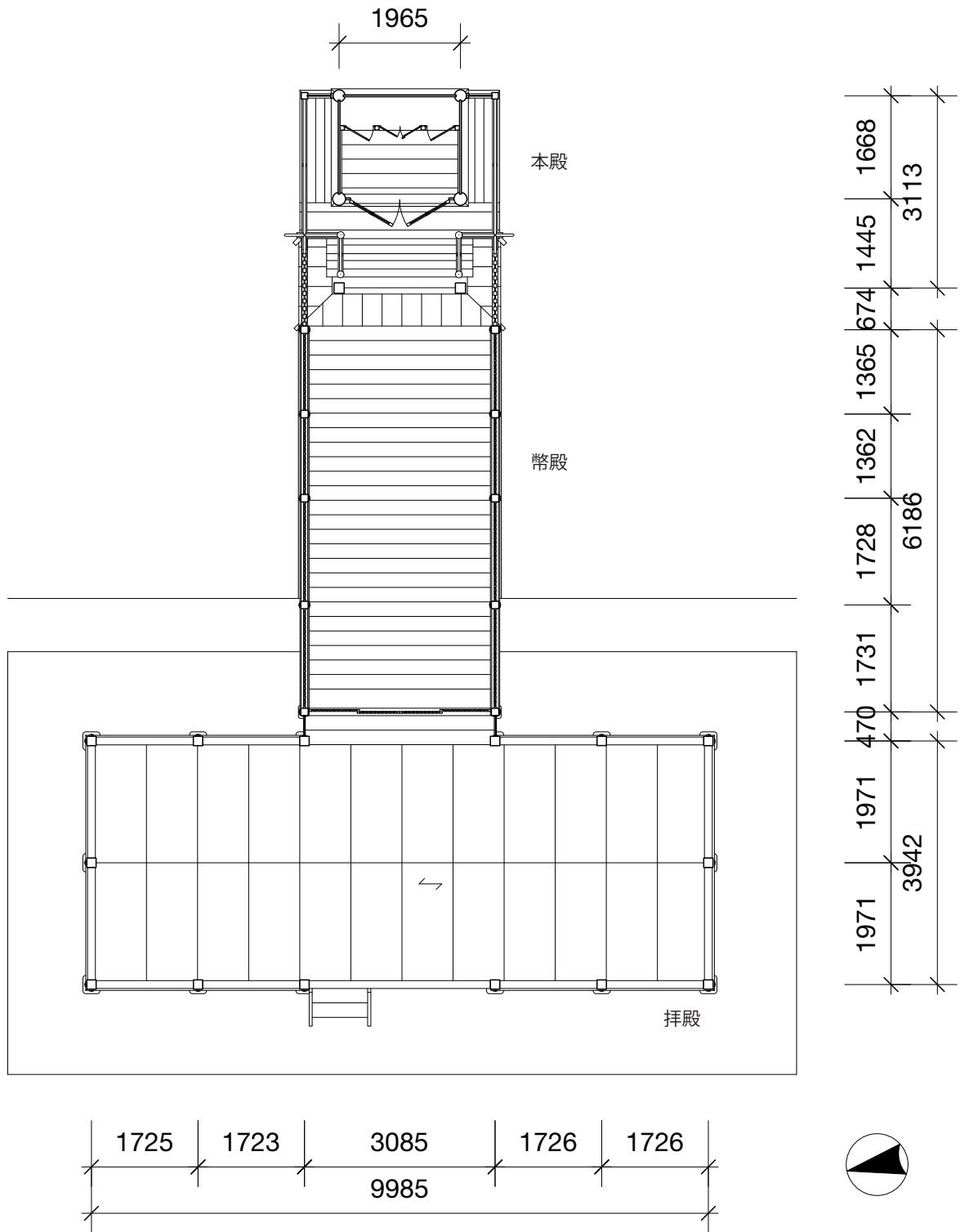


图3 五霊神社本殿・幣殿・拝殿平面図(1/100)



写真1 五霊神社本殿全景



写真2 五霊神社本殿身舎妻面詳細



写真3 五霊神社本殿庇見返し



写真4 五霊神社本殿繫海老虹梁

・身舎木鼻詳細



写真5 五霊神社本殿庇虹梁絵様



写真6 五霊神社本殿覆屋虹梁絵様



写真7 五霊神社幣殿内部



写真8 五霊神社幣殿背面および
本殿正面



写真9 五霊神社拝殿全景



写真10 五霊神社拝殿内部



写真11 五霊神社拝殿虹梁絵様



写真12 五霊神社拝殿隅部天井架構詳細

なお、本殿は覆屋のなかにある。覆屋の正面には虹梁が架かる。この覆屋の建立年代は棟札から昭和6年（1931）とわかるが、虹梁にある絵様は19世紀後期の特徴を有していることから、この覆屋の虹梁は転用材の可能性がある。

規模や装飾の豊かさからみて当地域の19世紀中期の神社本殿の代表する事例といえよう。

（3）幣殿（長床）

幣殿は、本殿と拝殿の間に立つ建物である。地元では長床と呼ばれている。

構造形式は、桁行四間、梁間一間、背面切妻造、妻入、銅板葺である。側面に格子窓を填める。軸部は角柱を腰長押で繋ぎ、前方二間には内法長押を入れる。また桁行中央と背面に虹梁形飛貫を入れる。組物や中備は入れない。天井は化粧屋根裏で、前方二間は中央部に竿縁を入れる。この前方二間の天井の張り方や梁の架け方は、拝殿と類似する。

建立は、棟札から昭和6年（1931）とわかる。

内部は一室からなるが、前述のように内法長押の有無、天井の仕様が前方二間分と後方二間分では異なる。また、中央にかかる虹梁と背面にかかる虹梁とでは絵様が異なる。絵様や風蝕からみて、幣殿の前方二間分が後述する拝殿（昭和6年建立）と同時期に建設されたもので、後方二間分は増築されたものと考えられる。

（4）拝殿

拝殿は、桁行五間、梁間二間、入母屋造、鉄板葺の建物である。柱間に建具を入れず四面を開放とする。

軸部は角柱を内法長押、頭貫、台輪で固める。このうち正・背面中央間のみは虹梁形頭貫とする。組物は、三斗椀肘木組実肘木で、拳鼻が付く。中備は正面中央間は組物とする。妻飾は木連格子である。天井は、桁行両端間の中央部に虹梁を架けその上に組物を置き、天井桁を受ける。そしてその天井桁より内部を竿縁天井とし、そのまわりを化粧屋根裏とする。このような天井の仕様は、多可町の近代に建設された拝殿に多くみられる。一方で、近隣の地域ではあまりみられない。多可町の近代の拝殿の特徴といえる。

建設年代は棟札から昭和6年（1931）とわかる。絵様や風蝕からみても齟齬はない。改造等はない。

（5）隨身門

隨身門は境内の入口に立つ切妻造、棧瓦葺の建物である。規模は、桁行正面一間、背面三間、梁間二間である。正面の中央の二本の柱を省略しているが、本来は三間一戸の平面形式といえる。

軸部は、角柱を腰長押、内法長押で繋ぎ、正面ならびに背面中央間に虹梁形飛貫を架ける。組物と中備は入れない。桁行両脇間の後方一間は、側面ならびに背面を板壁で閉じて、正面には格子戸を填めてその内側に板壁で閉じる。隨身は相対するように置かれており、参詣者は通路から格子戸越しに拝むようになっている。

妻飾は束である。正面と背面の虹梁の絵様以外に装飾はない。

建立年代を示す史料はないが、絵様から20世紀前期の建設と推定される。



写真 13 五霊神社随身門全景



写真 14 五霊神社随身門正面虹梁絵様

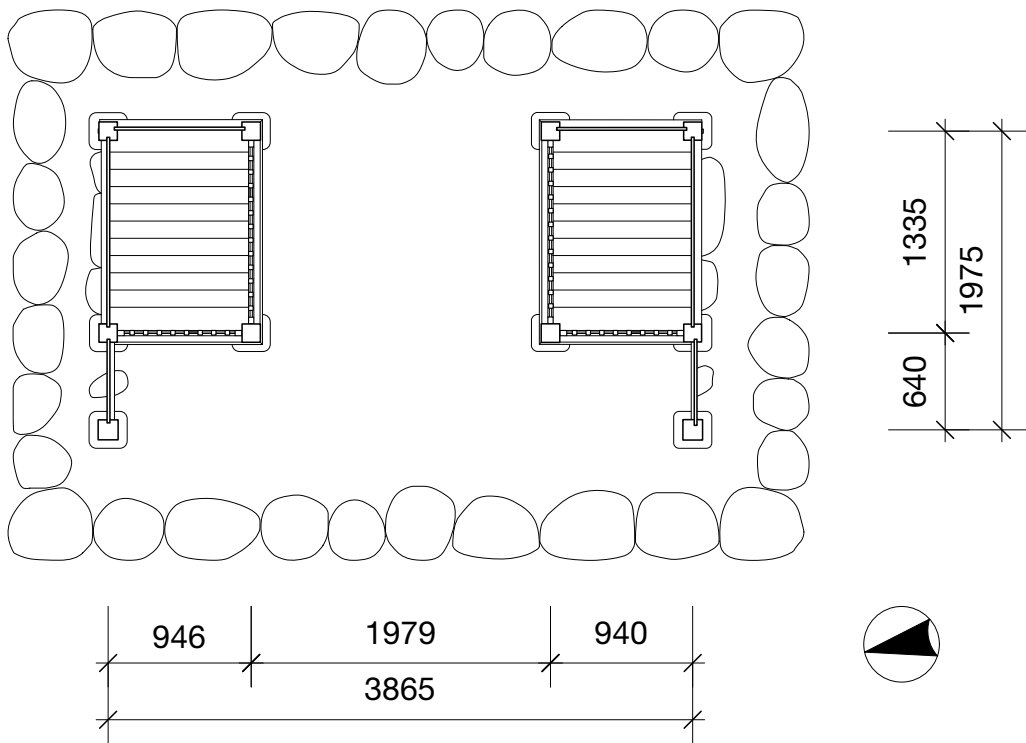


図 4 五霊神社随身門平面図 (1/50)

(6) 棟札

五霊神社には、以下の五枚の棟札がある（以下、丸囲番号はこの一覧に対応する。棟札名のうしろのアラビア数字は法量で、総高、肩部高、上幅、下幅の順番に記す。法量の単位はcmである）。これらはいずれも本殿内に置かれている。

- ①弘化2年（1845）天御中主尊宮上棟札（101.0、99.0、16.0、15.0）
- ②昭和6年（1931）五霊神社幣殿拝殿改築上棟札（105.8、103.6、19.8、21.3）
- ③昭和32年（1957）本社並拝殿屋根替札（63.2、62.0、18.8、19.3）
- ④昭和54年（1982）小宮新築札（75.2、72.2、23.2、20.2）
- ⑤昭和57年（1982）拝殿他修理屋根替工事札（75.2、82.2、23.2、20.2）

最も古い棟札は、①弘化2年上棟札である。現本殿の様式と一致するため、現本殿建立の際に作成されたものと考えられる。大工は、岩座神村の近隣にある多棚釜村の溝垣小右衛門と同じく近隣にある多田村の橋本勝次郎である。多可町の寺社建築については現在（2023年度時点）調査中であり、多可町で活動した大工の全体像を把握できる状況にはないが、近世前期には三木の大工や多可郡塚口新田（現 西脇市）住の飛田姓の大工が関わる事例が比較的多く、時代を下ると多可町内の大工が担う傾向がある。五霊神社は後者のなかの一事例と考えられる。幕末には多可町内に比較的高い技量をもつ大工が住み、五霊神社本殿のような質の高い本殿建築を造営できたのであろう。

②五霊神社幣殿拝殿改築上棟札は、現拝殿・幣殿の建立の際のものと考えられる。棟梁は西脇の安藤新作である。

③から⑤の棟札は屋根工事あるいは小宮（末社）の工事のものである。 (岸)

表1 加美区の神社一覧

	所在	構成	オトウ渡しの場所	氏子圏	オトウニンの決め方	オトウニンの人数	オトウ制度の変更	備考
1	荒田神社	松井庄の場 本殿、幣殿、拝殿		的場村 奥荒田村 寺内村 西脇村				
2	五社神社	松井庄 壹部 本殿、幣殿、拝殿	五社神社		順番	8人		
3	稲荷神社	松井庄 熊野部 本殿、拝殿 (本殿、幣殿、拝殿)*	稲荷神社		年齢順 (一代当)	4人	平成12年 北当・南当が統合	神事一御当事箱引継一直会 宮司・宮総代・オトウ人は幣殿に着座 区長・氏は拝殿に着座
4	五霊神社	松井庄 岩座神 本殿、幣殿、拝殿	五霊神社		家の順	3人		神事一御当事箱引継一直会 (宮司) 宮総代・オトウ人、区長は幣殿に着座
5	春日神社	松井庄 多田 本殿、幣殿、拝殿	春日神社	多田村 棚釜村	順番	5人 (棚釜のオトウニン 1人も参加)	かつては一代当	
6	大年神社	松井庄 山野部 本殿、幣殿、拝殿	大年神社		年齢順 (一代当)	1人		
7	大歳神社	杉原谷 丹治後山 本殿、拝殿	大歳神社	市原 丹治	入構順	2人		
8	西宮神社	杉原谷 清水 本殿、幣殿、拝殿	西宮神社	清水	クジ	4人		クジ一直接(盃)一御当事箱引継一盃
9	青玉神社	杉原谷 鳥羽 本殿、幣殿、拝殿	青玉神社		年齢順 (一代当)	2人	平成18年までは4人	青玉神社と大歳神社それぞれ1人ずつのオトウ人 2つのオトウは別々で回るため2度オトウを受ける
10	青玉神社	杉原谷 山寄上 本殿、廊下、拝殿	青玉神社		順番	3人		盃一引継
11	河上神社	杉原谷 轟 本殿、幣殿、拝殿	河上神社	轟 西山 山口	行政順	2人		
12	大歳神社	杉原谷 著荷 本殿、拝殿	大歳神社	著荷 中島 門村	順番	2人		明治に門村が分離 大歳神社のオトウ人の他に百々手祭のオトウ人が7人
13	殿嶋神社	杉原谷 門村 本殿、祝詞殿、拝殿	殿嶋神社	門村	クジ (20年に一度)	2人		
14	大年神社	杉原谷 三谷 本殿、幣殿、拝殿	大年神社	三谷 大袋	順番 (一代当)	2人		クジ一御当事箱引継一盃
15	熊野神社	杉原谷 市原 第一本殿、第二本殿、拝殿	熊野神社	市原 丹治	クジ	4人		クジ一盃一御当事箱引継 熊野神社・大歳神社それぞれのオトウのクジが行われるため15年に一度はどちらか当たる

2 五霊神社の建物と行事ーオトウワタシを中心にー

(1) 加美区のオトウ

多可町にはオトウ（お当）と呼ばれる神社の祭礼や神事において中心的な役割を果たす神社組織がある。オトウという言葉の用途は様々あるが、ここでは神社の組織のことをオトウ、オトウに属する当番人をオトウニン（お当人）、オトウニンの交代の行事をオトウワタシ（お当渡し）と定義しておく。

多可町の神社では年中行事のほとんどがオトウを基盤として行われている。その年中行事の中でもオトウワタシは、重要とされている。オトウワタシの際の着席場所に着目すると、組織の序列や儀式の厳格さがみてとれる。本節では、五霊神社がある多可町加美区のオトウの概要を述べる。

多可町は中区、加美区、八千代区の三地区に分かれており、加美区は最北地域で南北に広がる地域である。加美区のオトウについて、『兵庫県神社誌』と『多可町の年中行事Ⅰ』を元にまとめたものが、表1である。表中の神社は、公的な記録が残されている神社として『兵庫県神社誌』に記載されているもののうち、現在の加美区に所在する15社を抽出した。

この表1からは、加美区では神社でオトウワタシを行っている事例が多いことが分かる。なお、隣接する中区では地域の公民館で行う場合が多い。また、オトウワタシは、神事、オトウジバコ引継、盃事、直会などいくつかの行事から構成されている。

一方、オトウニンの決め方やオトウニンの人数、オトウワタシを行う建物は神社によって異なる。多可町の神社の特徴として挙げられるのが、本殿、幣殿、拝殿という建築形態の神社が多いという点である。多可町の社寺建築の調査は現在進行中で未整理ではあるが、加美区でも表中の15社中10社がこの形態をとっていることが分かっている。名称の違いを考慮しなければ、祝詞殿や廊下と記載されている神社も同形態と考えることができ、15社中12社がこの形態を有している。そして、オトウワタシが行われる神社の多くが、幣殿を最も重要な場として使用していると考えられる。その一例が岩座神にある五霊神社である。

(2) 五霊神社のオトウワタシ

五霊神社の氏子は岩座神地区に住む住民で、2022年8月に聞き取り調査をした時点では16世帯で構成されていた。五霊神社の行事としては二十三夜さん、湯立て祭、亥の子祭、秋祭りなどがある。

五霊神社の運営には、宮総代1人、オトウニン3人が関わるが、実際にはオトウニン3人で神社の管理をおこなっている。宮総代の交代は集落の総会で合議によって決まっており、任期はないが最低5年から6年務めるのが通例である。一方、オトウニンは任期が1年と決まっている。オトウニンは3人の中から1人、カギトウ（鍵トウ）と呼ばれる役職につく。通常は3人の内の最年長者がカギトウを務め、境内の建物の全ての鍵を管理する。そして、オトウワタシは秋祭りの際に行われる。

オトウワタシには、新旧のオトウニン、宮司、区長、氏子全16戸から1人ずつが参加する。

オトウワタシの流れは以下の通りである。五霊神社のオトウワタシは、神事、オトウジバコの引

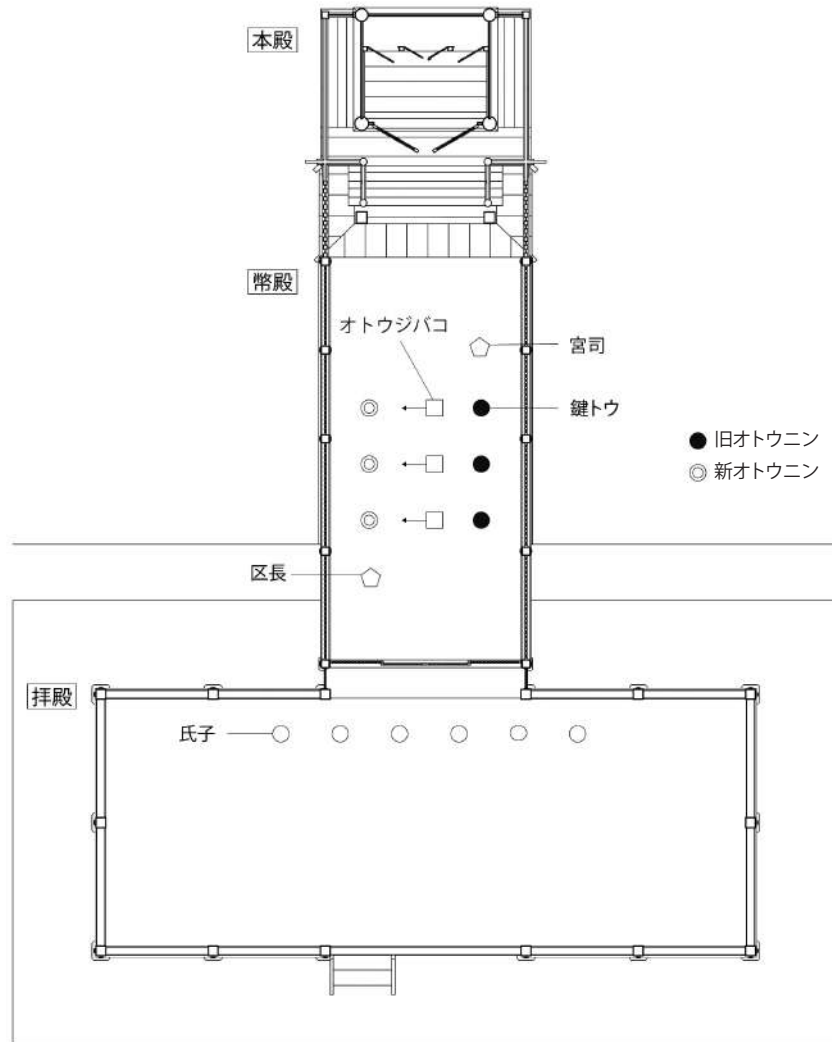


図5 オトウワタシの着席場所



写真15 オトウジバコ引継の様子



写真16 秋祭りの様子

継、直会の3つ行事から構成される。まず、宮司による神事が行われた後、オトウジバコを旧オトウニンから新オトウニンへ引き継ぐ（写真15）。オトウジバコは、3人のオトウニンそれぞれが1箱ずつ1年間管理する箱で中には神社ののぼりが入っており、のぼりは秋祭りで拝殿の前に立てられる（写真16）。オトウジバコの引継が終ると全員拝殿に着座し、お供えしていた御神酒とスルメイカで直会が行われる。宮司夫妻が本殿に背を向ける形で本殿側正面に座り、左回りに区長、氏子と続いて輪になる。直会の準備は、拝殿の本殿に向かって右側で旧オトウニンが行い、宮司から順に御神酒とスルメイカが配られる。直会の後は区長から片付けや今後の集落全体の予定について連絡がされた後、片付けに移る。以上で解散となり拝殿から退出する。この際に新オトウニンは1人ずつ、旧オトウニン3人にオトウジバコを持って挨拶をして帰る。

次にオトウワタシの場とオトウニンなどの着席の場について述べる。境内には、第1節でのべたように隨身門のほか、本殿、幣殿、拝殿などがある。このうち本殿、幣殿、拝殿は接続して立つ。なお幣殿は地元では「長床」（ながとこ）と呼ばれている。オトウワタシは幣殿と拝殿でおこなわれる。幣殿には、新旧オトウニン、宮司、区長が着席する。旧オトウニンが南側、新オトウニンが北側、宮司が本殿寄り、区長が拝殿寄りに着座する（図5）。オトウニンの中でも、カギトウは最も本殿に近い場所に着座する。また、氏子に着席の序列はなく全員が本殿に向って拝殿に着座する（図5）。

このように五霊神社のオトウワタシでは、オトウニン、宮司、区長と氏子では座る建物（場）が異なり、さらに幣殿ではオトウニン、宮司、区長と厳密に着席場所、順が決められている。以上から、幣殿がオトウワタシにおいて最も重要な場であると考えられる。（橋本）

おわりに

岩座神にある五霊神社は、弘化2年に建立された本殿のほか、昭和6年建立の幣殿・拝殿や隨身門がある。特に本殿は棟札から建立年代ならびに大工がわかり、岩座神地区がある加美区の19世紀中期の神社本殿建築を代表する遺構のひとつといえる。

また、これらの社殿の使われ方をオトウワタシを事例にみていくと、幣殿・拝殿をともに用いる点に特徴があることがわかる。

多可町では本殿・幣殿・拝殿が一式で残っている事例が多く、その数は近隣の地域と比べても圧倒的に多い。その理由は定かではないが、幣殿・拝殿がオトウなどの行事の場として古くから使われ続けていたことが一因として考えられる。

多可町の寺社建築調査は継続中である。用途等にも留意しつつ調査を続けていきたい。（岸）

参考文献

兵庫県多可郡教育会編 1985『多可郡誌』臨川書店

兵庫県多可町文化遺産活性化実行委員会編 2014『多可町の年中行事Ⅰ』

兵庫県神職会編 1938『兵庫県神社誌』中巻、臨川書店